## 5. 物語の読み方

物語の読み方について、お話したいと思います。

物語には、初めて見る漢字が、かなり多く使われていますので、子供たちに、独力でこれを読むことを期待しても、それは無理です。

初めは、お話を聞かせるような調子で、物語を読んで聞かせます。この時、子供たちに、字をたどらせたいと思って、ゆっくりと読みがちですが、これはいけません。

お話を聞く場合でも、文章を読む場合でも、全体の意味を正しく捉えるために適当な速度というものがあるのです。遅過ぎるよりは、むしろ、早過ぎるくらいのほうが解りやすいものです。一般に、ゆっくり話したり、ゆっくり読んだほうが解りやすい、と考えられていますが、これは間違いです。

したがって、最初は、子供たちに文字をたどらせることなど考えないで、普通にお話をする時の速さ以上には遅くしないで、すらすらと読んでいくようにします。

お話を聞く場合でも、物語を読む場合でも、同じものを繰返すことの楽しみと、新しいものを聞く（読む）楽しみとがあります。

**コラム　部首　奇**

大と可との会意形声字。“大いによろしい”ことから“珍しい”。珍しいことは二つとないので“一つ”の意味も。また珍しいことは“不思議なことでもあり、変だなと“あやしむ”ことにもなる。

珍しい　→「珍奇」「奇計」

一つ　→「奇数」

不思議　→「奇術」「奇跡」

あやしむ→「奇怪」

【寄】　家の意味の宀と、奇との会意形声字。“家に身を倚せる”という意味。また“与える”意味にも使われる。

物語を知り尽していた場合は、ここはこう、あそこはどうと、安心して、知り尽した道を散歩するような楽しみに似たものがあります。それと反対の場合は、未知の土地を旅する時のように、物語がどうなるだろうかと、心を踊らせながら聞く（読む）楽しみがあります。

幼児には、とりわけ、同じものを繰返すことを楽しむ性質があります。

繰返すことによって、それを身に付け、自分のものにして成長するために、それは必要な性質です。だから、幼児にとりわけ強く備っているのでしょう。

絵本の物語は、繰返し読んで聞かせて、幼児がソラで言えるまでにしてやりたいと思います。それには、一節一節、復唱させるようなやり方で、読ませるのも好いと思います。

幼児は、文字が読めなくても、大人のまねをして、本を読むまねをしたがるものです。だから、先生のあとに付いて復唱することは、易しく出来て、しかも結構幼児に満足できることです。

物語が暗誦できるようになりますと、言葉と文字とを対応させて、どの字は何という字かを考えるようになり、目立った漢字からだんだんと覚えていきます。

物語に出てくる漢字は、取立てて教えてやらなくても、長い間には、前後の関係から判断して読み、読んで覚えるものですから、取立てて教える必要はありません。

また、知らない漢字を、前後の関係から判断して読むことは、思考力を伸ばし、頭の働きを良くする作用がありますので、教える代りに質問して考えさせましょう。

変えてみたい提出の場

物語の漢字が、前後の関係で読めるようになったら、その漢字をカードにして、子供たちの認識をさらに深めるようにしましょう。

物語の漢字は、物語の中では読めても、カードで出されると読めないということがよくあります。どこで、どんな形で出されても読めるよう、

㊟㊤㊥　**部首**　**音**

古い形は で否と同じ形。“反対”“そむく”という意味で、「背」と同音同義。「違背」「背反」などと使う。

【倍】　“そむく”の音と人との会意形声字。倍反（そむく）。対立が生ずることは一が二になることで、“一が二にふえる”ことを倍と言うようになった。

【培】　倍加（ふやす）の意味の音（ハイ）と土との会意形声字。“草木に肥えた土を加えて、草木を育てる”こと。“つちかう”こと。

認識を深める工夫をしてやらなければなりません。

ある有名な学者の話ですが、ある日、駅で会った人から声を掛けられたが、確か見覚えのある顔だと思うだけで、だれだか思い出せない。気になっていたところ、翌日、隣の庭でその顔を発見した。

「何だ、お隣のご主人だったのか」というわけです。

いつも隣という決りきった状態で会っていたのに、思いがけなく異った場所で会ったために思い出せない、ということはよくあることです。結局、隣という条件を頼みにして、認識を深めることをしなかったためです。

漢字の認識を深めるために、提出の場をいろいろ変えてみることが必要です。

## 読書力を低下させる拾い読み

かなは表音文字ですから、幼児たちは、どうしても「あ、る、ひ、お、ば、あ、さ、ん、が……」というように、かなを一字ずつ拾って読む、ということになります。

読書は、ある程度スピードがないと、文意が捉えにくい、と前に述べました。それはなぜでしょうか。

それは、日本語の性格として、「文章を、初めから終りまで、ひと息に速く読み通さないと、文意を掴むことが難しい」という性格があるのです。

例えば、「昨日、私は、東京駅へ、友人の見送りに、行きました」という文を例に考えてみます。「昨日」「私は」「東京駅へ」「見送りに」という言葉は、それぞれには全くつながりのない言葉であって、これだけ聞いたのでは、まことに支離滅裂という感じで、文意も掴みようがありません。

これは、

昨日、行きました。

私は、行きました。

東京駅へ、行きました。

見送りに、行きました。

という関係にあるのですから、「昨日」から「行きました」まで、ひと息に読み通さないと、統一が着かないのです。

かなばかりの文章は、スピードが出ませんから、読み終っても、統

一が着かず、文意が掴めないことが少なくありません。電報文など、短くても、何回か読み返すことがよくあります。

　読書の際のスピードは、単にスピードと考えないでいただきたいと思います。つまり、最初の読書を、拾い読みさせないような配慮が絶対に必要だ、ということを忘れないでいただきたいと思います。

コラム　**部首　周**

　用と口との会意字。用は牧場に張り巡らした柵の象形。周は“□を巡らす”ことで“言葉を十分に尽くして説明する”から転じて広く“物事のゆきとどく”こと。

【週】　“まわりをまわる”が本義。今ではもっぱら七曜の一まわりする意味に使う。

【調】　ゆきとどく意味の周と言との会意形声字。言葉がよくゆきとどいて、そのため物事が“よくととのう”という意味。